佳作

希望を捨てない

岩手県一関市立室根中学校
２年　鈴木　花穂

私が２歳７カ月の時です。あの東日本大震災が発生しました。私の記憶に残っていることは、父母と一緒に車の中で寝泊まりしたことだけで、周りで起こっていた大変なことも、後々家族から聞いて知ることができました。私が暮らしている地域は、海から遠く、山々に囲まれており、沿岸部のような大きな被害はありませんでした。隣り町は津波の被害に遭っており、盛土された土地が広がり、被災した建物も残っていたので、その被害の大きさを知ることができました。しかし、自分がリアルに経験したことではないため、本当の被害を知ることはできませんでした。

小学５年の時、室根町矢越山に植樹をする行事が行われました。山に木の苗を植えて森を育てる活動です。同じ時期に気仙沼市唐桑町のカキ養殖場の見学もあり、山と海のつながりを初めて知ることができました。山に降った雨が森の木々や土壌に吸収されて、その水が川に流れ、やがて海へと流れていくのです。山から海へと流れてくる水には、多くの微生物が含まれており、それを養分にして海洋生物が育ちます。そしてまた、海から水が蒸発して、空に雲を作り、雲が山に雨を降らせるのです。この自然界で起こっている大きな循環が、人々の暮らしを支えてくれているような気がしました。それまでは、山と海の関係性など考えもしませんでしたが、深いつながりがあることを認識することができました。今は、たくさんの地域で植樹活動が行われていますが、この地道な活動が山を守り、海を守り、人々の生活を守っていくのです。

ところが、東日本大震災で海は一度死んでしまったかのような状態になりました。その唐桑町のカキ養殖場が被害を受けた時の状況を台本にした演劇を、小学６年の生活発表会で、発表しました。

震災によって、大量のガレキが海に流され、養殖場も壊滅したのです。油が海に流れ出し、黒い海となったのです。カキを育ててきた人々は落胆し、もう養殖業を復活させることが難しい状況にまで至っていました。津波で家族を失った人、家を流された人、仕事をなくした人、全てを失った人、悲しみの中で何も考えることができなかった人々がたくさんいたはずです。多くの生命を奪った大震災は、生き残った人々の希望も奪ってしまったのです。

20 名の同級生がそれぞれの配役の下で、いろいろなことを考えたと思います。津波の恐ろしさ、命のはかなさ、長い年月をかけて育ててきたものが一瞬でな

くなるむなしさ、やり切れない思いもあったことでしょう。

しかし、海と共に生きてきた人々は、希望を捨てなかったのです。私は大学からきた研究員の役で、カキのエサとなる植物プランクトンを発見するのです。植物プランクトンの量は森の腐葉土から溶け出す鉄分の量によって左右され、「良いカキを育てるためには、上流にある森が大切である」といわれるゆえんでもあります。養殖場の復活は、必ず海は元通りになると信じ続ける気持ちと海を守るために森を守り続けてきた地道な活動によってもたらされたのです。地域一丸となって森を守り続ける活動は、震災後まもなく再開されて、今年は小学５年生になる私の弟も参加しました。バトンを渡すように、この不変とも言える自然の営みが受け継がれています。そして、これからも私たちの手で１本１本の苗を大切に育てていきたいと思います。

これまでも、たくさんの自然災害が日本中の各地で起こっています。しかし、時間の長短の違いはあっても、必ず再び立ち上がり、また歩き出しています。津波で何もなくなった場所には、住宅が再建し、公園や公共施設が整備され、また人が戻ってきています。もう、昔のことも思い出せないくらいに復興しているのです。

これから私が生きていく間にも、さまざまな出来事が起こるはずです。どんなに悲しくて苦しくて、どうしようもない時が訪れたとしても「希望を捨てない」というメッセージを未来の自分に伝えたいと思います。必ず明るい未来が待っていると信じて、自分を信じ、周りにいる仲間を信じていきたいです。

そして、もう一つ忘れてはならないことは、人間の生命を支えているのは、今残されている海や川や山などの自然だということです。目前に広がる自然を守り続けていくためには、この自然の中で暮らす一人一人が自分の事として考え、行動しなければなりません。どんなに技術が進歩して、暮らしが便利で快適になっても、大自然の大きな循環の中で、私たちは生かされていることを忘れずに、大人になった自分や、これから生まれてくる子どもたちにも伝えることができればと思っています。